

都市部、地方を問わず、在宅の医療と介護を支える訪問診療のニーズは高まる一方である



医療・介護の仕事

ハードな仕事を支える

プロフェッショナルとしての使命感

時折接していながらも、見ているだけではなかなかわからないのが、医療・介護の現場。プロフェッショナルとして活躍する人びとの仕事を通して、その実態に迫った。

医師

地域を支える訪問診療 感謝の言葉で原点回帰

医師の仕事は病院の中だけではない。昨今は、高齢化が進む地域を支える訪問診療所で活躍する医師も増えている。国も、2006年から24時間体制の往診などを行う診療所に対して診療報酬を引き上げて、こうした医師を後押しし

ている。

佐藤志津子さん（写真）が、3月5日、24時間対応の「さくらクリニック」(東京都中野区)を開業したのは03年のこと。開業時、40人ほどだった患者数は今では約200人に達した。

訪問診療の巡回車に乗り込む佐藤さんが手にしたバッグは、聴診器や血圧測定機、さらにメスやピンセットなどの小道具で埋まる。1日の出勤回数は、計7〜8便。

医師、看護師、リハビリテーションのスタッフは、それぞれのクルマで現場に向かう。

患者の約8割は、神経難病や脳血管障害、認知症だ。深夜の緊急電話があれば、即座に駆けつける。深夜、

土・日曜日の往診が月10回に上ることもある。緊張とは縁を切れない仕事だ。

末期ガンの患者など、看取りの局面に立ち会うことも珍しくない。今は、病院で亡くなるケースがほとんどだが、そこに抵抗感を抱く家族もいる。最後の時間を自宅で大事に過ごすなかで、家族の側にも満足感が生まれる」という。

佐藤さんは、大学病院の研修医を経て、複数の病院を経験。その後、大学院で後輩の指導をしているときに友人の訪問診療所を手伝ったことが転機となった。

「大学病院の外来には、3分診療」との非難があるが、勤務当時は短い時間で診なければ廊下で暴動が起ころうような状態だった。しかし、訪問診療はていねいに診ることができるので、とても感謝される。自分が忘れていた原点に帰れた」

今後の夢は、地域内の診療所が訪問診療で受け持つ時間帯と曜日を担当する「診診連携」を実現することだという。

看護師

到達点は患者の回復 鋭い観察力が決め手

医療業界の一大勢力である看護

師。准看護師まで含めれば、各所で働く看護師の数は125万人にも上っている。

大病院から、クリニック、介護の現場と活躍の場はさまざまだが、非常に高度な技術が求められる職場も存在する。

心

臓破裂、くも膜下出血……。14台のベッドが並ぶ昭和大学病院のICU(集中治療室)には、常に救急搬送などで患者が運び込まれる。その数は、年に約1100人。多くの患者の体は、人工呼吸器や点滴、医療機器などとながれている。

「患者が下痢していたら経管栄養は無理と医師に伝える。24時間、患者と最も密接なのは看護師だからです」

入職からICUひと筋15年、集中治療部で主任を務める高野洋さん(次ページ写真)は、観察力の重要性をこう強調する。

現在、このICUで働く看護師は、男性8人と女性44人。昼間は、各ベッドに1〜2人の看護師が張り付く手厚さだ。

毎朝9時から、呼吸、血圧、脈拍、体温を測定。体に入る管からの廃液があれば、その量や色の濃淡もチェックする。

体温の上昇一つを取っても、原因が、尿路感染、血流感染、肺炎